

途中下車

すれば

前途は

無効

ですか？

みどりのくま

雨を見ている。車窓からずっと眺めている。ディーゼル機関車特有の細かい振動が建て付けの悪くなった窓枠をカタカタと揺らしていることも気にはならない。惹かれるまま長いこと雨を見つづけている。もの悲しさが弱りきった心を映す鏡のように、雨はずっと降り続く。

窮屈だ。とても息苦しい。鉛色の雲が山の頂を隠し、麓には靄が掛かり、その狭まりが心を締め付ける。

機械的で感情の無い案内放送が告げる。

「次は憂鬱、次は憂鬱。お急ぎのところ恐れ入りますが、上り列車とのすれ違いのため十二分間の待ち合わせとなります」。

ゆううつ、か。多分聞き間違えだろうが、いまの気分にちょうどいい。降りてみることに決めて荷物を網棚から降ろす。他に降りる乗客は無いようだ。

列車は身をよじるように金属音を響かせながらホームへと滑り込んでゆく。手動式の扉開閉ボタンを押して、ホームへ降り立つ。肌寒い。相変わらず雨はしとしとと降っている。

跨線橋を渡り、改札へ向かう。所在なげに鋏をカチカチいわせている駅員に、この町の見所など訊ねてみる。目的地を決めずに行き当たりの旅である。何の予備知識も無い。

駅員は少し思案顔になり「そうですねえ、これと言ってお勧めできるほどの場所は無いんですがねえ、強いて挙げるとなると」と、駅前から続く真っ直ぐのケヤキ並木のほうを指差しながら「この道をずっと下ってゆくと、左側にお城風の建物があるんですが、それが町役場の建物でして、建物自体も歴史的価値のあるものなんだそうですが、その中に資料館が併設されてまして、そちらで詳しい観光案内もしておりますので、そちらへ行かれたらいかがでしょうか」とのこと。めったに観光客など来ないのだろう、要領を得ない答えである。まあいい、適当にぶらぶらしてみることにする。

閑散とした駅前広場には客待ちのタクシーが一台停まっている。運転手は雑誌を被って居眠りしている。

ケヤキ通りから斜めに入る道にはペルソナ商店街と書かれたアーケードがあり、そちらへ行ってみることにする。いわゆるシャッター商店街という風情でどこも固く閉じられている。よそ者を拒否するかのようだなどといらぬ連想をしてしまう。まだ時間が早いというだけであろうと勝手に解釈する。

そんなことをぼんやり考えながら歩いていると、空腹感がこみあげてくる。何か食べ物屋は無いだろうかと思色色の商店街を見まわす。無性に人と話したくなり胸を搔きむしられる。誰もいない。

失ったものがあることを知りながらそれを取り戻す術を知らない無力感が日常化してからどれほどの年月が経つのだろう。今居るのはタール色に塗り固められた世界だ。ひび割れた世界だ。見放された世界だ。高い空をじりじりする日差しのまぶしさを見上げていた頃を懐かしむ思いがよぎってゆく。

いや、もうよそう。そんなことを考えてもしかたの無いことなのだ。とにかく旨いものでも食べ

よう。どこか開いている店は無いか。

ふいに鼻腔を刺激する香ばしい感触で我にかえる。錯覚かと疑うが確かにいい匂いがする。目の前の路地から漂ってくる。

誘われるまま路地へ入ると、そこは猥雑な原色に彩られた歓楽街といった風情で、思わず「うっ」とうめいてしまう。なんだこれは。これは現実か。疑うのと同時にとても懐かしいと思う。なぜ懐かしいのか言葉では言えない。ただ、下腹のあたりがきゅっと締め付けられるような感触だ。底冷えのする風が通り過ぎる。【おでんあります】と書いた張り紙がばたばた揺れる居酒屋が目に入る。

藍色の暖簾をくぐると出汁の匂いが全身をやさしく包み込んでくれる。カウンターには昼間というのに半被を着て鉢巻をした若い衆が酒を飲んで賑やかに話している。人の善さそうな主人の手元を覗くと旨そうなはんぺんが目に入る。思わず「はんぺん」と口走り、「へい」と威勢のよい返事が返ってくる。何か飲み物とお品書きをみて焼酎も頼む。出汁がよく染みて旨い。たまごとこんにゃくも頼む。ふうふう言いながら頬張る。大根も頼む。からしをつけてかじる。旨い。焼酎を飲む。胃が焼けるようだ。旨い。

一息ついたところで主人が話し掛けてくる。

「お客さん初めてだね。どこから来たい」

「うん。みやこから」

「ほう、そりゃ結構なこって」笑う。

「こんな旨いおでんは久しぶりだよ。秘訣はあるのかい」

主人は得意げに鼻の下をこすりながら「三代前から継ぎ足しの出汁でさ」と答える。

「これから町を見て歩こうと思ってるんだけどおすすめはあるかい」と訊ねたとき、横で酒を飲んで話していた若い衆がやおらこちらを向いて話かけてくる。

「それなら夕鶴神社へいらっしゃい。今日は夜店も出ますよ」と教えてくれる。

そうか、ゆううつではなくてゆうづるだったのか。

「お祭りかい」と訊ねてみる。

「そうですね、お祭りというよりは、思い出に静かに浸るようなものでしょうか」

別の男が続ける。「祖霊や精霊に逢えるんです」。

俄然興味が湧いてくる。精霊というものを想像する。強く惹きつけられる。何が起こるのだろうか。

「これをつまんでみてください」小皿を勧められる。

鶏の皮をにんにくでカリカリに焼いたものだ。食べると口腔に辛みがひろがり鼻腔から香ばしさが抜けてゆく。焼酎をがぶりと飲む。身体中が熱くなる。すっかり酔ってしまった。

神社までの道筋を教えてもらい、礼を言い店をでる。

表に出ると風が心地いい。空は相変わらずどんよりと曇っているが雨はあがっている。酔いを醒ましながらくっくり歩いていこう。

歓楽街を抜けると漆喰の土塀に挟まれた道が続いている。一定の間隔で右の折れ左に折れ、古い

城下町の区画がそのまま残ったかのような道である。道幅も狭い。曲がり角や門には灯明が取り付けられていて、やわらかい光を放っている。日が暮れるとさらに趣があるだろう。

人に出会うようになる。男は着物を着て草履を履いている。女は髪をお団子にして渋色の着物に襟や帯は淡い色を合せ塗り物の下駄を履いている。皆礼儀正しく深深とお辞儀をしてくれる。こちらも丁寧に辞儀を返す。

静かではあるが町全体の穏やかな息づかいが感じられる。悪くない。このような安心感がかつてはどこにでもあったのだと考えたところで、意識は記憶の彼方へ沈んでゆく。

早くして父を亡くし、家計を出来得る限り助けることを義務付けられ、働きながら高等学校まではなんとか終わることができたのです。亡父の知人で世話をしてくれる人もあり、どうにか難関を突破して下級官吏としての職を得ることができたのです。始めた頃は公正と秩序に従い、けしてぶれることなく職務を遂行することに誇りすら感じていたのです。

しかしながら壁はほどなくやってきました。キャリアやコネが物を言うのはどの世界でも同じです。そんなことは頭では解っていたはずなのです。しかし、現実目にあたりになると、つい薄っぺらな正義感が邪魔をするのです。黙っていればいいものを、つい余計なことを口走ってしまうのです。

当然のこととして風当たりは強くなります。孤立することが多くなるのです。

しかし、挫けることなく勤めあげる自信はあったのです。あったはずなのです。

それは前触れも無くやってきたのです。当たり前ことができなくなったのです。

手が震え、呂律がまわらなくなり、訳が判らず呆然とするばかりです。

異状は程無く周囲の知るところとなり、徐々に重要な仕事から外されました。気は焦るばかりで状況は悪化するばかり。簡単な仕事でさえ出来なくなったのです。

専門医により神経衰弱と判定され、休職を勧奨されたのです。

こんな屈辱を受け入れるわけにはいかないと反論しようにも使い物にならない者の居場所は無いのです。期待に応えられない者に帰る場所など無いのです。

やむなく現状を受け入れ、治療が始まりました。それは苦しい毎日でした。薬の副作用に悩まされ、家にいてもいつも監視されているような気がしました。

その頃はよく空を飛ぶ夢を見ました。結末は必ず墜落する恐怖に飛び上がるのです。

そして、辛さから逃げるように旅に出ることにしたのです。当てる無旅。目的の無旅。しかし必ずいつかは終わりがあろう旅。

ああ、思い出してはいけないのだ。くだらない。どうでもいいのだ。

辺りはすっかり暗くなってしまった。灯明の揺らめく光が迷路のように連なる先に頭ひとつ抜け出した社の森がぼんやりと浮かび上がる。誘われるままに歩いてゆく。

徐々に人影が増えてくる。

おそらく部落ごとのお揃いの半被を着た若い衆が早足で追い抜いてゆく。草履の音がざっざっざっ。

鮮やかな模様の着物を着た娘が泳ぐように歩いている。下駄の音がかろんころん。

ざっざっ、かろん、ざっざっ、ころん。

賑やかな話し声が聞こえてくる。

ひわひわそわそわ。ざわざわすわすわ。

なんだか歌っているようだ。徐々に気分を高揚させる。

いつしか人波に呑まれている。

灯明に照らされおぼろげに見える人々がざわめきと調和して滑るように流れてゆく。

柔らかなほほえみをたたえ、陰影が強調された横顔は控えめな恍惚感をにじませているように見える。

この身までふわりと軽くなるような感覚に襲われる。

社は丘の上にあるようで、長い石段が続いている。両側には赤い灯明がぽつりぽつりと揺れている。頂上の方は鬱蒼として窺うことができない。

皆浮遊するように登ってゆく。

一緒に上ってゆく。息が切れる。

足音が周りの木々に反響して拍子木が乱打されているように聞こえる。意識が遠くなる。頂上はまだ見えない。

立ち止まり一息付くことにして振りかえり下を見下ろす。暗闇に沈んだ町を不規則に縫う光が幾何学模様のように見える。

気を取り直して再び石段を登り始める。

遠くから笛や太鼓の音が聞こえてくる。

ぴいひゃらとんとん、ぴいひゃらとん。

頂上は近いようだ。

鳥居が見えてくる。その深い赤と注連縄から下がる紙垂の白が鮮やかに感じる。

両側には威嚇するように狛犬の像が佇んでいる。光の加減によっては笑っているようにも見える。

身の引き締まる思いで鳥居をくぐると、参道がすらりと伸びていて青白い光を放つ灯籠が規則正しく照らしている。

奥の方には屋台もいくつか出ているようで人だかりしている。

くつろいだ気分で屋台を覗きながら歩いていると、げそ焼きの匂いに食欲をそそられる。ひとつ買って噛んでみると歯ごたえと香ばしさにさらに食欲をそそられる。ぼたん汁もいただく。芯

から温かくなる。

眠気が襲ってきて少し休みたくなって周りを見渡すと、ちょうど良い大きさの石が目に入り、腰掛けてぼんやりとする。

人々はゆらゆらと揺れる影絵のようで、夢の中にいるようだ。現実味がない。

いや、これは夢だ。そうに違いない。

狐のお面をした小さい子供がこちらをじっと見ている。じっと佇んでいる。おや、迷子かなと注意してみるとそれはお面ではなくて狐を模した化粧である。白粉に頬紅を入れ、ぷっくりとした唇の真中を紅でかたどっている。緋の着物にわさび色の帯をして、無垢の下駄を履いている。離れたところからこちらを試すように見つめている。

初めての場所で始めて出会うはずなのに、どことなく記憶に引っかかるような気がするのである。既視感がある。

知っている子供の顔をひとつおぼろげに思い浮かべてみるが該当しない。兄弟や親戚の子供時代を思い浮かべるがもうひとつはっきりしない。

とりあえず話しかけてみようと思いつき立ち上がりこちらから近づいて行く。屈みこむ。

「こんばんは。おかあさんはどうしたの」

その瞳は澄んでいて底無し沼のように深く、吸い込まれるような感覚に戸惑ってしまう。

心のゆらぎを見透かしたかのように一歩近づいてきて袖を掴まれ、屋台のほうを振り返り「あっち」と一言。そうか、あっちか。

「よし、行こう」手を引いて歩く。

ぶらぶら歩いていると、屋台の天幕から声がかかる。

「アラ、可愛らしい坊ちゃんですね」

「迷子のようなんだけど」と答えると、怪訝そうな顔をして「アレ、そっくりだから親子かと思いましたよ」と言われた。

社務所を教えてもらい、そちらへ連れて行く。

放送をお願いすると名前を聞かれ、確認しようとする。

「お名前は」答えてくれない。

仕方ないので年恰好で放送してもらおう。「温まりますよ」と葛湯をいただく。

しばらく待っても音沙汰が無いので、預かってもらい先にお参りをしようと考え、相談しようとする。察したのか稚児は瞳で連れて行ってほしいと訴えかけてくる。不思議に心が動かされる。保護者が現れたら待っていていただけよう願いをして、お参りに連れていくことにする。祠へ近づくと大勢の人が頭を垂れてお祈りをしている。静寂につつまれている。私達も加わり、見よう見真似で祈る。

祠の奥を透かし見ると、ぼんやりとではあるが青白く冷たい輝きを放つ玉が台に鎮座している。一瞬きらりと輝いたように見えた。「うん」と稚児が声を発する。いまのが見えたのだろうか。目を閉じて祈る。どうか苦しみが和らぎますように。どうかこれからも無事に進んでゆけますように。どうか健やかに暮らせますように。

心が少し軽くなったように感じる。気のせいだとは思いますが。

さあ社務所へ戻ろうかと思ったとき、なにやら頭の中で声がした気がした。言葉というよりは低い唸りのような声。御神体を見つめる。しかし何も答えてはくれない。

袖を引かれて我にかえり「どうしたの」と聞くと社務所のほうを指差している。さては保護者が見えたのかと歩いてゆくと、併設されている売店のほうを指差し「あっち」と言う。

おみくじや絵馬など売られている。少女といった風情の鮮やかな衣装をまとった巫女がにっこりと微笑んで「いかがですか」と勧められる。おみくじを引くことにする。

「引いてみるかい」稚児を抱え上げる。とても軽い。

束になった紐からその小さなもみじのよな手で一本を握り引くと玉が一つ上がってくる。八十三と入っている。巫女が背後の引き出しから八十三番の札を取り渡してくれる。

開いてみると吉とある。まあ平凡なところだ。

その先を読もうとすると稚児は突然「だめ」と叫ぶ。

「どうしたんだい、なぜだめなんだい」と問いかけてみても頭を振るばかりで要領を得ない。

仕方が無いので丁寧に折りたたんで仕舞う。

社務所へ戻ると誰も名乗り出てこないという。いよいよ困って、駐在所には届けておいた方がいいということになり連絡してもらおうがどうやら巡回中らしく連絡がつかない。

仕方が無い、一晩面倒を見るか。そう考えて自分自身に驚いてしまう。そんなことを考えるなんて、一体どうしたのだろうか。問題を抱え込める精神状態ではないはずなのに。

面倒なことは御免こうむりたい。そう考えて稚児の方を見る。

うつむいて足をぶらぶらさせながら座っている姿を見ていると何かこみ上げてくるものを感じた。

面倒なんかじゃない。そんなことを考えた自分が恥ずかしい。

「この近くに泊まれるところはありますか。もう遅いので私が一晩預かります」

民宿を紹介してもらおう。歩いて行ける距離だという。道を教えてもらい明日の朝来ることを約束し、稚児の手を引いて表に出る。

参道を戻り石段を降りる。

町とは反対方向にうねる山道を登ってゆく。辺りは真っ暗でまばらな街灯の弱弱しい明かりだけが頼りだ。

程なくぽつりと明かりが灯る二階建てが見える。民宿だとわかる。

背の低い柴垣で囲まれている。古い農家風の藁葺き屋根の平屋が元々は母屋だったのだろう、その庭に建つ瓦屋根のほうに看板が掛かっている旅荘梅が枝と読める。

玄関を入るとランプの明かりが少し薄暗い。

帳場には翁という表現がぴったりする老人が座りキセルで煙草を喫んでいる。

「こんばんは。神社で紹介していただいた者なのですが、あの、部屋はありますでしょうか」恐る恐る訊ねてみる。

ふっと煙を吐き出してこちらを向き、きゅっと笑みを浮かべて囁いた声で「あい。旦那さんと坊ちゃんのお二人さんですね。空いておりやすよ」ほっとする。

宿帳に記入していると奥から女中が暖簾を分けて出てきて「まあまあ遠いところをお疲れでござ

いましょう。すぐご案内いたします」と人懐こい声。

二階の部屋へ通される。部屋は六畳ほどの広さで中央に茶机があり、奥にある縁には椅子が二脚置いてある。

床の間には梅の一輪挿しがあり古い掛け軸が掛かっている。

まず風呂に入ることにする。建物の裏に露天があるという。

「温泉が出るんですか」ちょっと意外に思い訊ねてみる。

「いえいえここは出ないんですけど、この奥に古い鉱山がございまして、いまはもう廃鉱になっているんですけど、そこにラジウム鉱泉がございまして量り売りやら配達やらしているんです。そこから買っているんでございますよ」とのこと。

なるほどそういう商売があるのか。

早速一階へ降り奥へ向かう渡り廊下を過ぎ葦を編んだ囲いの中を覗くと、湯船を池に岩を山に見立てた箱庭のようにこぢんまりとした風情のある設えである。

洗い場で稚児の化粧をきれいに落としてやる。身を清めてから入る。

湯船は座ると肩のあたりまであるので、稚児を膝に抱いて入る。

心地よい刺激のある泉質で長湯をすると当たりそうだ。

足元を照らすためのやわらかいランプ以外は自然光で、冷たい月明かりが辺りを薄く照らし全とおぼろげに見せる。

見上げると降るような星空で闇が深いことがわかる。

身体がふわりと浮かび上がるような、夜空に吸い込まれてしまいそうな不思議な感覚に襲われる。

怖いような心地よいような。

忙しすぎたのだと言い聞かせたい気持ちと甘えるなど叱る気持ちが交錯する。

これからどうすればいいのだろうか。

この空のようにいつかは晴れる日がくるのだろうか。

稚児はうつらうつらしながらすっかり身を任せている。

やがて晴れる日はくるのだ。ぼんやりとそう思う。

湯から上がり浴衣に着替えて部屋へ戻り、窓際で夜風に心地よく吹かれていると、夕食を運ぶ足音が聞こえてきた。

山菜と川魚の塩焼きと五穀御飯という質素だが滋味深い夕餉をしみじみと噛締める。

稚児を寝かしつけ熱燗を飲みながらくつろいでいると、床の間の掛け軸が目に入る。

淡い色合いの水墨画で、水辺に老師が佇み遠く岩山が霞んでいる。

惹きつけられ見つめていると、すっと吸い込まれるような感覚にあっと声をあげる間も無く意識が遠くなる。

耳慣れた響きをもつ声が聞こえてくる。

誰だろう。思い出せない。

その声は語りかけてくる。

「悩んでいることを全て包み隠さず話してみなさい」

身構えて答える。

「僕には悩みなんてありませんよ」もちろん嘘だ。

咎めるように「偽るでない」と続く。

「偽りからは何も生まれぬぞ。何も得られぬぞ」

反発して「僕は何も得たいとは思いません」と答えてしまう。

問答はかみ合わない。

思いきって質問してみる。

「あなたは誰ですか」

「わしはお前の祖父である」

「おじいちゃんですか。はあ」

祖父はどんな人だったか思い出そうとする。

そうだ。まだもののわからないような幼い頃に亡くなったことを、だから直接の記憶と呼べるようなものがないことを思い出した。

そのほとんど接点の無い人がなぜ話しかけてくるのだろう。

「おいおい、お前が憶えていなくともわしは憶えておるぞ」

「はあ」

「なんだ、その返事は全く」

「はあ」

あいかわらずかみ合わない。一体何の用だろう。

「何の用とは失礼な」

「はあ、ごめんなさい」

声だけが聞こえて像が結ばないのは視覚情報が無いのだから当然かなどと考えていると、改まった声で問いかけてくる。

「お前の心が平衡を失っていることはわかっておるのじゃ。全て吐き出してみなさい」

瞬間、走馬灯のように忌まわしき記憶がよみがえってくる。窒息しそうな感覚だ。思い出したくない。いやだ。いやだ。やめてくれ。ほっといてくれ。

「ほおっておけるものか、ばかもの」一喝される。

「自ら克服しようとせねば一生その苦しみから逃れる術はないのじゃぞ」

「精神論ですか。いまはそんな時代ではないのですよ」言い返してみる。

「この愚か者めが」一喝される。

しばし沈黙が流れる。落ち着いた声で語りかけてくる。

「さあ、話してごらん」

ふっと気持ちが緩む。嘔き出してくる。

「きっかけはよく解らないのです。追われるように生きていること、それを当たり前として受け入れている常識というもの、それが辛いことではあるけれども辛いと言うことは恥ずかしいこと、そんなどうでもいいことと無視し黙殺されるべきことが心の中で大きくなりだしたとたんに、日常生活そのものが苦痛に満ち溢れた全く耐えがたいものとして押し掛かってきたのです。くだらないことを思い煩うことに苛立てば苛立つほどなおさらくだらないことが心を占めるのです」
どうやら黙って聞いていてくれる感触があるのでそのまま続ける。

「気づくべきでないものに気づいてしまったのではないのかという予感があったのです。見なくてもいいものを見てしまったという後悔があったのです。ただただ馬鹿なことをしている自分に憤りがあふれてきたのです。憤れば憤るほど馬鹿なことばかり考えてしまうのです」

深呼吸をして続ける。

「誰にも話すことのできないことで思い煩うことが、社会というものから滑り落ちることへの恐怖として現れたとき、なにもかも出来なくなってしまったのです。それがまた苛立たしいのです」

ひゅっと息を吸い込むような音がしたが、あいかわらず黙って聞きつづけてくれているようだ。

「何ひとつ特別のことはないはずなのに、全てが耐えられなく辛いこととして感じられていよいよこれは自分では把握することのできないことが起っているのではないかと不安になり、さらになにもかも手につかなくなったのです」

言葉にしてみると自分が何に鬱々としてきたのかが客観視できるような気がする。

すると、核心を求めようとする気持ちが膨れ上がってくる。解消したい。楽になりたい。

ごほんと咳払いが聞こえた。

「聞いていればしかし、簡単なことではないのかな」

簡単なこととはどういうことだろう。

「考えてみるがいい。今までの話には自分のことしか出てこないではないか」

それはそうでしょう。

「自分だけで勝手に考え勝手に悩み勝手に落ち込んでいるだけのことではないか」

はい、その通りです。

「それなら自分で馬鹿馬鹿しいことを考えるのを止めればそれで済むことではないのか」

それが出来れば苦労はしません。

「なぜ出来ないのか」

それは。どうすれば余計なことを考えずに済むか解らないから。

「ふむ、話が先に進まぬな」ため息混じりの声。

「視点を変えてみよう。誰か相談のできる人はおるのか。悩みを打ち明けることができる人はおるのか」

その問いかけに向きになって反論してしまう。

「弱みを見せることなどありえないことです。競争社会を生きぬくとはそういうことです」

「競争というからには、敵もあれば味方もあるのではないのか。孤立無援というような物言いは間違っておるじゃろう」

そんな単純な二項対立の構図で説明出来るような簡単で明瞭な時代に生きてはいないのだ。誰が何を考えているのかまるでわからない不気味な時代を生きているのだ。いつどこでなにが災いするかわからない油断ならない時代を生きているのだ。

「大層な言いようじゃのう」呆れたという声でゆっくりと続ける。

「まるで自分は特別な時代に生まれた不幸な存在であるかのように聞こえるが、自惚れるのもいいかげんにせいということじゃ。なにも特別なことなどありません。いいか、誰も信用できんというのはお前自身が誰からも信用される存在でないことの証明なのだ。いいか、自らが心を閉ざしては誰もお前に心を開くはずはないのだ。全く単純なことじゃよ」

言うとおりで。しかし、それができないこともあるのです。認めてください。

「人は誰も一人で生きているわけではない。一人で生きられるものなどいないのだ。臆病になって殻に閉じこもってはいけないのだ。たとえ傷つくことがあっても他者と関わりつづけなければならないのだ。そうやって苦労して築き上げる人間関係がやがてはお前を助けてくれることもあるのだ。その苦労を放棄したお前に一人前のことをいう資格などない」

そんなことはわかっているのだ。それでもどうしていいのかわからないのだ。そんな建前はなんの役にも立たないのだ。

「いや、おまえはもう気づいているはずじゃ。どうすればいいのか知っているはずじゃ」

それを教えてください。いったいどうすればいいのですか。

しかし、もうそれ以上いくら待っても答えは返ってこなかった。

薄暗い室内。斜めから差し込む弱いけれども鋭い波長を持つ光に照らされた彫りの深い景色。
そうか、酔ってそのまま眠り込んでしまったのか。悪い夢を見た。
身体が芯から冷えている。窓を開けたままらしい。
視線をめぐらすと月光に照らされた窓際に稚児が椅子に座って外を見ている。
いつの間に起きたのか。風邪でも引いたら大変だ。そう思って立ち上がろうとした時、ふいにくるりとこちらを向いた。
まるで陶器でできた人形のように青く冷たい表情をしている。
その顔は厳しく、真一文字に結ばれた口は動かない。
責めているのだ。そう思った。だらしのない大人を責めているのだ。そう確信した。
そうだ、だらしのないのだ。だらしのないからつまらないことに振り回されているのだ。
しかし、と思う。弱い人間なのだ。どうしようもなく弱いのだ。救いようのないほど弱いのだ。
声が聞こえる。稚児の口は動かない。それでも声が聞こえる。
「私はあなたです。あなたが捨てたものです」
まぎれもない、自分の声が語りかけてくる。するとこれは夢か。まだ悪夢が続いているのか。
稚児はじっと見つめている。
「私はあなたが忘れてしまったものです」
嵐のように記憶が襲ってきた。思い出したくないものがよみがえってきた。
棺にしがみつき泣いている子供。これは私だ。父の葬儀だ。これから出棺というとき、いやだいやだと泣き喚いて困らせたのだ。
しかしこれがなぜ捨てたものなのか、忘れたものなのか。
「そうではありません。あなたはこのときから自分だけで全てを考えるようになったのです。責任を背負い込んでいるという悲壮感だけを糧に生きようとしてきたのです」
どうということだ。
「心を閉ざし全てを疑い自分だけを信じて暮らしてきたのです」
なんのことだ。
「不幸な境遇だと同情されることをなによりも嫌い、誰にも負けたくないという執念を燃やしてきたのです」
そんなことはない。
「失敗することを恐れるあまり、がんじがらめになっているのです」
そんなわけではない。
「弱みを見せることを嫌うあまり、押しつぶされそうになっているのです」
そんなこと認められるわけない。
「あなたはいま、人恋しさに飢えているのです。それなのに自尊心という仮面に隠れた驕りが邪魔をして、息苦しさにもがいているのです」
そんな。

「あなたはもう気がついていないはずですよ。人のやさしさに触れる心地よさを。人のために何かをすることに見返りを求めないことを」

そうか、それが捨てたものか。忘れてしまったものか。

「さあ、あなたの心に欠けてしまっているものを、構えることのない無垢で清らかなものを拾い上げてみなさい」

それはどこにあるのだ。

「ただ見失っているだけです。それはずっと心の淵に深く沈んだままです。さあ、拾い上げてみなさい」

ゆっくりと目を閉じる。心を開く。覗きこむ。

押しつぶされそうに暗い雲に覆われた真っ暗な海が広がる。記憶がよみがえる。これは子供の頃に見た海だ。厳しい冬の海だ。

丸いものが浮かび上がってくる。表面は鋼色で鱗のようにひび割れている。荒涼とした日常のうちに軽蔑し閉じ込めていたもの。

ずっと前から気づいていたのだ。それを認めようとしなかったのだ。きっかけを待っていたのだ。ずいぶん遠回りをしたのだ。

手のひらにやわらかい感触と少し高い体温を感じる。目を開かずとも稚児をこの手で抱えていることがわかる。ゆっくりと抱きしめる。するすると入ってくる感触がある。取り戻したのだ。

暗い海に浮かぶ球からはらはらと鋼色の鱗が剥落してゆく。象牙色の玉が現れる。遠い空が仄かに明るくなってゆくと徐々に玉は澄んで水晶のような虹色を放つ。心地よい疲労感が全身にひろがりそのまま眠ってしまう。幸福感につつまれながら眠ってしまう。

遠くにひそひそ話し声が聞こえる。ゆっくり目を開ける。ねずみ色の天井が目に入る。まだ夜明け前か。辺りを見回してみる。びっくりして飛び起きる。なんだここは。

四畳程度のコンクリート打ちっぱなしの四角い部屋。いや、部屋じゃない。鉄製の扉には鉄格子の入った小さな窓がある。これは牢屋だ。どうしてこんなところにいるのだ。

頬をつねってみる。夢ではない。いったいこれはどういうことだ。

鉄格子から外を覗いてみると看守らしき制服の男が見える。

「すみません、ここは何処ですか」我ながら何を言っているのかと思う。

男はじろりと見ただけで、卓上の受話器を取り上げてぼそぼそ話している。

呆然と様子を見守っていると、階段を降りてくる足音が聞こえてきた。別の男が扉をがちゃりと開けて入ってくる。「出て」厳しい声でそれだけ言うと先ほどの男と二人で両脇を抱えられ連れていかれる。言葉が出ない。

取調室と書かれた部屋に入るとパイプ椅子を指差し「座って」と言われる。

「名前は」答える。「住所は」答える。「職業は」答える。

一通り身分確認が済むと、男はやおら話し始める。

「あなたは保護されたのです」

なぜだろう、身に憶えがない。

「道に倒れていたのです。通り掛かりの方が助けようとしたのです。しかしそのあとがいけない。心配して助け起こそうとした人に暴言を吐いて暴れ出したのです。それで通報をうけた我々が駆けつけたところ、あなたはひどく酔っている様子で意味のわからないことを言うばかりで、仕方なく拘束しました」

ああ、あれは留置場だったのか。そんなことが頭に浮かぶ。

「こちらへはどのような用件で来たのですか。出張ですか」

「いいえ、旅行です。昨夜はお祭りを見物して旅館に、そう、梅が枝という旅館に泊まったのです。それがなぜ道に倒れていたのかは全くわかりません」

男は、いや警察官は怪訝そうな顔をして、同席して調書を書いている別の警官に目配せをした。外へ出てゆく。

「いま確認を取ります。ところでどなたか身元を引き取りに来られる方はいますか」

「えっ、迎えに来てもらわないといけないのですか」

「規則ですから」

仕方がないので自宅へ連絡を取ってもらえるようお願いする。

それにしても合点がいかない。旅館で寝た後の記憶が無い。寝ているのだから無くて当たり前だが、そうすると意識のないままふらふらと街へ出たということか。そんなことがあり得るのか。

そんなことを考えていると席を外した警官が戻ってきて取り調べをしている目の前の警官になにやら耳打ちする。表情がいつそう険しくなる。

「あなた、正直に話しなさい。昨日はお祭りなんか無いし、梅が枝という旅館も存在しないよ。本当はどこでなにをしていたの」

頭が真っ白になる。

「正直に話しなさい」

別の警官が入ってきて目の前の警官に耳打ちする。呆れたような表情になり、ゆっくりと話し始める。

「あなた、休職して自宅療養中なんですね。お母様が迎えに来てくれるそうですよ。あまり心配をかけるものじゃないですよ」諭すような言い方をする。その表情は哀れみと困惑に満ちている。

思わずうなだれてしまう。この歳になって親に迷惑をかけてしまったこともそうだが、昨日の出来事はどうやら全て幻覚だったということが堪えた。

どこからが幻覚なのだろう。ぼんやり考える。多分あの原色に覆われた歓楽街からだろう。あの場違いな雰囲気のところから夢を見ていたのだ。

すべて幻だったのだとわかると心が萎んでいく気がした。また鬱々とした日常が始まるのかと思うとげっそりしてしまう。

お茶を頂きながら迎えを待つ。だいぶ時間が掛かるだろう。ご迷惑をお掛けしたことを詫びながら肩身の狭い思いをして待ちつづける。窓から見える空は晴れて千切れ雲が流れてゆく。雲は自由にどこまでもゆけるのだろうかなど考える。わたしにはもう行ける場所は無い。ここで行き止まりだ。元の場所へ帰るだけだ。振出しへ戻るだけだ。

しかし、少しはうまくやれそうな気もする。

そんなに現実には甘くないことはわかっているが、今までとは違う景色が見られそうな気がする。なにげなくポケットに手を入れると古ぼけた紙片が出てくる。

何だろうと思ひ広げてみるとおみくじである。

昔どこかで引いたものが残っていたらしい。

文字がかすれていて判読しづらいがよく目を凝らして読んでみる。

『次々と災難が襲いかかるが、倦むことなく根気よく勉めればやがて好転するでしょう』

そうですか。なんとかなりますか。

空はどこまでも高く青い。

途中下車すれば前途は無効ですか？

<http://p.booklog.jp/book/123354>

著者：みどりのくま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ktnwtuy001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123354>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト